

# 中学校教師における怒りの感じやすさと表出に関する研究

専攻 人間発達教育

コース 教育コミュニケーション

学籍番号 M16009D

氏名 松永 梨沙

## 問題の所在と本研究の目的

学校における体罰の問題は、その是非が問われ続けられており、数多く研究もされている。しかし、教師による体罰事件は連日後を絶たず、単に「怒りやすい教師だから」と、問題を個人化していることが危惧される。教師の「怒り」という人間的側面に注目しない限り、体罰の問題は解決しえないだろう。

そこで、本研究においては、これまでほとんど扱われてこなかった教師の「怒り」に着目し、中学校教師の怒りの実態を明らかにすることを目的とする。その際、「怒り」というものを、どのようなことに怒りを感じるかという「怒りの感じやすさ」と、感じた怒りをどのように表すのかという「怒りの表出」について、分けて扱うこととする。

また、教師という職業の特性にも着目をし、教師の怒りにそれぞれ影響を与える要因についても明らかにする。その際、考慮する変数としては以下のものを用いた。①性別 ②担任の有無 ③職種(管理職か否か) ④メンタルヘルス ⑤ビリーフ⑥パーソナリティ

## 調査

### 1. 調査協力者

兵庫県のA市の公立中学校 11 校の教員 288 名に対して調査を実施した。そのうち、回答に不備のあったもの、また今回は、通常の勤務で授業を行っていない養護教諭、栄養教諭、支援員等は除いた計 272 名を対象とした。性別の割合は、男性 148 名、女性 123 名(不明 1 名)であり、平均年齢は 39.88 歳( $SD=11.75$ )。

### 2. 調査時期

2017 年 7 月～8 月

### 3. 調査内容

#### (1) 個人の属性

①学校名 ②性別 ③所属学年 ④年齢 ⑤職種(9 件法、校長・教頭・主幹教諭・教諭・養護教諭・栄養教諭・臨時講師・非常勤講師・その他) ⑥経験年数 ⑦経験学校数 ⑧担任の有無 ⑨一週間のうち部活動にかかる時間(平日/土日) ⑩一週間のうち、家で仕事をする時間(平日/土日) ⑪一週間のうち、自分の好きなことをする時間(平日/土日)の記入を求めた。

⑨⑩⑪については 1 日あたりの平均時間を自由記述。なお、分析を行うにあたり、①～⑧までを「属性」、⑨～⑪までを「業務時間」としてそれぞれ扱った。

#### (2) メンタルヘルス

中学校教師の精神健康度を捉えるため「精神健康調査票 12 項目版 (G H Q : General Health Questionnaire)」を用いた。4 件法。

また、教師の日常的なストレスを測るため、田中・杉江・勝倉(2003)の「教師用ストレス尺度」を用いた。本研究では教師の怒りの様相と関連すると思われる「多忙」因子 8 項目のみを使用。5 件法。

#### (3) ビリーフ

教師特有の価値観を測定するため、河村・國分(2000)の「教師特有のビリーフ尺度」を用いた。5 因子(「児童管理・生活指導に関する因子」「教師の熱意・使命感に関する因子」「期待する児童の行動及び態度に関する因子」「児童に期待する教師への信頼感に関する因子」「権威・役割志向の教師の対応に関する因子」) 39 項目、4 件法。この中から因子負荷量の低い項目等を除外し、計 28 項目に改編した。4 件法。

#### (4) 怒りの感じやすさ

中学校教師の怒りの感じやすさの指標として藤井(2005)による「中学校教師版怒り経験尺度」を用いた。因子負荷量の低かった 2 項目を除外し、全 23 項目で回答を求めた。4 件法。

#### (5) 怒りの表出

中学校教師の怒りの表出の指標として Spielberger(1985)の「怒り表出尺度 (AX : Anger Expression Scale)」を用いた。AX は怒りの様相を「怒りの表出 (Anger-Out)」「怒りの抑制 (Anger-In)」「怒りの制御 (Anger-In)」の 3 側面から捉えることができる。各 5 項目の計 15 項目。4 件法。

#### (6) パーソナリティ

パーソナリティを測定する尺度として Gosling, Rentfrow, & Swann(2003)の TIPI を元に、小塩・阿部・カトローニ(2012)が開発した「日本語版 Ten Item Personality Inventory (略称: TIPI-J)」を用いた。計 10 項目、7 件法。

## 結果と考察

### 1. 教師特有のビリーフ尺度の因子分析

探索的因子分析（最尤法，プロマックス回転）を行ったところ，固有値の減衰状況から，6因子，4因子，3因子での因子構造の可能性が考えられた。因子分析を繰り返して行った結果，4因子が解釈可能であったため採用した。第1因子は「毅然たる指導に関する信念」，第2因子は「教職のやりがいに関する信念」，第3因子は「担任至上主義に関する信念」，第4因子は「従順な生徒像に関する信念」とした。

### 2. 中学校教師の怒りをもたらす要因

中学校教師の怒りの感じやすさと怒りの表出をどの程度説明するのかを検証するために，怒りの感じやすさと怒りの表出の各下位尺度得点を目的変数とする階層的重回帰分析を行った（強制投入法）。Step 1では「属性」，step 2では「業務時間」，step 3では「心理的変数」を投入した。その結果，すべての従属変数に関してはstep 3においてR<sup>2</sup>の変化量が有意となり，GHQ，ストレスナー，ビリーフ，TIPI-Jを投入することによって，より効果的に説明可能であることが示された。

step 3の結果では中学校教師の怒りの感じやすさの「生徒の言動」に対してはビリーフ「毅然たる指導」と「担任至上主義」，TIPI-J「神経症傾向」からの有意な正の関連，ビリーフ「やりがいのある教職」からの有意な負の関連が示された。「仕事の多忙さ」に対しては，TIPI-Jの「神経症傾向」と「勤勉性」からの有意な正の関連，ビリーフの「やりがいのある教職」からの有意な負の関連が見られた。「同僚・保護者との人間関係」に対しては，「年齢」「職種」「部活動（土日）」ビリーフ「担任至上主義」からの有意な正の関連が見られた。

怒りの表出の「表出」に対しては，TIPI-J「開放性」「生徒の言動」「同僚・保護者との人間関係」からの有意な正の関連が見られた。「抑圧」においては，TIPI-J「神経症傾向」「勤勉性」からの有意な正の関連，「やりがいのある教職」からの有意な負の関連が見られた。「制御」に対しては，「担任至上主義」「部活動（土日）」からの有意な正の関連，「職種」からの有意な負の関連が示された。

### 3. 中学校教師の怒りをもたらす心理的要因

さらに，「心理的変数」の中で，特にどの変数が中学校教師の怒りの感じやすさや表出に対して影響を与えているのかを検証するため，ステップワイズ法による重回帰分析を行った。その際，男女差を考慮し，性別ごとに分析を行った。ここでは，主な結果は以下の通りであった。

中学校教師の怒りの感じやすさ尺度と怒りの表出の下位尺度得点をそれぞれ従属変数とし，心理的変数

を独立変数として投入した。

「生徒の言動」に対して，男女ともに「ビリーフ」からの影響度が高かった。また，男性は「担任至上主義」「毅然たる指導」，女性は「従順な生徒像」が有意な正の影響を示しており，「ビリーフ」の種類は男女で異なるということが示された。

さらに，男性においては影響度の高い変数として，他の心理的変数は挙げておらず，「ビリーフ」だけが影響度の高い変数として抽出された。男性は管理的なビリーフが「生徒の言動」に対する怒りに影響しているということが示唆された結果となった。

「怒りの表出」に対しては「同僚・保護者に対しての怒り」や「パーソナリティ」からの影響が高いということが示唆された。「怒りの抑圧」に対して，男女共に「生徒の言動」が影響度の高い変数として示された。また，男性では「GHQ」，女性では「神経症傾向」も挙げられており，メンタルヘルスも「怒りの抑圧」に影響を与えているということが示唆された。

## 結論と今後の課題

本研究の結果から，中学校教師が「生徒の言動」「仕事の多忙さ」「同僚・保護者との人間関係」に対して，よく怒りを感じているのかという点においては，全体的に「やや怒りを感じている」という程度だといえる。

一方でビリーフの得点は高かった。教師文化の中で培われたビリーフの中で，中学校教師が生きているということが確認されたといえる。

また，体罰と関係のある「生徒の言動」であるが，「生徒の言動」に対して教師が怒りを感じる際，「教師特有のビリーフ」が色濃く影響しているということが明らかとなった。数ある要因の中でもビリーフが，「生徒の言動」に対する怒りに影響を与える要因として確認できたことは，特筆すべき重要なことであると考える。教師自身がこの職業に特有のビリーフに縛られて怒りを感じやすくなっているということが本研究より明らかになったといえる。

ビリーフは時として必要であるが，教師の多くが信じているものなので，そこからはなかなか抜け出しにくい。だからこそ，教師自らが自分の怒りについて省察し，それが教師特有のイラショナル・ビリーフによるものではないか検討すること，また，そのとらわれた考え方を良いビリーフへと修正する手立てが，今後，教師の怒りの問題を解決する第1歩であると考えている。

今後の課題として，まず「誰に対しての怒りなのか」を特定し，さらに教師と生徒の関係も詳しく見ていかなければならない。本研究をきっかけに，より良い生徒—教師関係を築いていくような議論をこれから発展されていければと考える。

主任指導教員 中間玲子  
指導教員 中間玲子